

東京都在住ジャイナ教徒にみるトランスナショナリズム

山本須美子*

Transnationalism and Adaptation by Jains to the Japanese Society in Tokyo

YAMAMOTO Sumiko*

Abstract

This paper aims to shed light on the transnational relationship of Jains residing in Okachimachi, Taito-ku, Tokyo with India. The paper focuses on the repositioning of their life in Japan as a transnational domain and the differences between the parents' and next generations.

Okachimachi, meaning a 'jewellery town', dates back to the Edo period. However, the number of Indian jewellers has been increasing, especially since the 1990s. Indian jewellers are engaged in a transnational business, where coloured stones and diamonds from around the world are processed in Indian factories and then imported into Japan for sale. In some cases, the jewellery business has been handed down from generation to generation for 500 years or more, which makes it a unique ethnic business in Japan.

From 2017–2019, I conducted an interview survey of six Jains in the age group of 40-60 years and five Jains in their teens and 30s living in Tokyo. Furthermore, in September 2019, five jewellers were interviewed in New Delhi and Jaipur, India, to understand the jewellery business in India and their relationship with relatives living in Okachimachi.

The paper concludes that the parents' generation runs the jewellery business in Japanese society by living amongst a strong Jain community formed in Okachimachi and maintains relationships with relatives in India. They maintain their Jain identity and adapt to Japanese society without establishing close relationships with the Japanese. However, the next generation is more involved in Japanese society both professionally and socially and also maintains relationships with Indian relatives while being somewhat involved with the Jain community formed by their parents' generation.

キーワード : ジャイナ教徒, 宝石商, 御徒町, トランスナショナリズム, 適応

Keywords: Jains, jewellers, Okatimachi, transnationalism, adaptation

* 東洋大学社会学部 ; Faculty of Sociology, Toyo University, 5-28-20 Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8606 / yamamoto-s@toyo.jp

はじめに

本論の目的は、東京都在住ジャイナ教徒が形成するインドとのトランスナショナルな関係の実態を明らかにすることを通して、日本での生活をトランスナショナルな領域に位置づけ直し、日本社会への適応のあり方を世代間の差異に焦点を当てて考察することである。

2018年12月法務省在留外国人統計によると在日外国人数は2,637,251人となり、特に首都圏での外国人は増え続け、外国人との共生という課題は益々重要性を増している〔法務省在留外国人統計 HP 2018〕。これまで在日外国人との共生については、政策や支援のあり方、学校への不適応・不就学問題、地元住民との関係、異文化の受容等、様々な視点から論じられてきた。これらの研究では在日外国人がいかに関係に日本社会に適応するかという枠組みにおいて論じられ、彼ら/彼女らが出身国あるいは他国と持続的な関係を保持していることに焦点が当てられていなかった。しかしながら、在日外国人の日本における生活は、出身国との繋がりが強くなっている。送金をしたり、グローバル化の進展とメディアの進歩により、出身国の家族や親族の訪問が容易となり、日本にいても SNS 等で頻りに連絡を取っている。それゆえ、日本社会への適応のあり方を論じるには、出身国との間のトランスナショナルな領域に日本での生活を位置づけ直すことが必要であると考えられる。

2018年6月法務省在留外国人統計によると、在日インド人人口は33,271人で、都道府県別にみると人口が一番多い東京都は12,818人、次いで神奈川県5,304人、千葉県1,746人、埼玉県1,561人である。在日インド人は、首都圏に集中していることが示されている〔法務省在留外国人統計 HP 2018〕。

本論では東京都台東区御徒町在住のジャイナ教徒を取り上げて、彼ら/彼女らのインドとのトランスナショナルな関係を明らかにすることを通して、日本社会への適応のあり方を検討したい。では、なぜ御徒町在住のジャイナ教徒を取り上げるのか。「宝飾の街」といわれる御徒町のルーツは江戸時代に遡るが、特に1990年代からインド人宝石商が増え始め、現在では約100社以上、その内半数以上はジャイナ教徒である。インド人宝石商は世界各地の色石やダイヤモンドの原石をインドの工場加工しそれを日本に輸入して販売するという、トランスナショナルなビジネスを展開している。500年以上も前から代々宝石商を継承してきた場合もあり、また親族がほとんど宝石商である場合も多く、日本におけるエスニック・ビジネスとして特異な存在である。

また、9割以上が宝石商といわれる在日ジャイナ教徒は、2000年初めに御徒町にジャイナ寺院を建立し、SNSで結びつき強固なコミュニティを形成している。そこで育ったジャイナ教徒の若者は現在10代から30代となっているが、インドとどのようにトランスナショナルな関係を築き、親の背景にあるインド文化を継承し、日本社会で生活しているのだろうか。

本論ではインドとの結びつきの最も核となっていると考えられる宝石ビジネスと親族との結びつきに着目してインドとのトランスナショナルな関係を捉える。

研究方法としては、2017年から2019年に東京都在住の40代から60代のジャイナ教徒6名(表1参照)と、10代から30代のジャイナ教徒の若者5名(表3参照)に、ライフヒストリーを構成するインタビュー調査を実施した。また、2016年8月28日には、8日間にわたって実施されるジャイナ教の最大の祭りであるパルーシャン(Paryushan)のクライマックスである指導者マハーヴィーラの生誕を祝うマハーヴィーラ・ジャンマバチャン(Mahavir Janmavachan)の参与観察を行った。2019年10月27日には宝石店で実施されたインドのお正月であるディワリ(Diwali)に参加した。さらに、2019年9月にはインタビュー対象者の出身地であるインドのニューデリーとジャイプールにおいて宝石商5名(表2参照)にインタビューを実施し、インドにおける宝石ビジネスの現状と御徒町在住の親族とのつながりを明らかにした。

論文の構成としては、Ⅰではインド人の日本への移住を歴史的に跡付けた後、先行研究を整理し、本論の位置づけを明らかにする。Ⅱでは、ジャイナ教の概要を述べた後、宝飾の街となった御徒町の歴史とインド人宝石商の来日、ジャイナ教寺院建立やジャイナ教徒のSNSでの結びつきを検討し、御徒町に形成されたインド人コミュニティの特徴を述べる。Ⅲでは、親世代の在日ジャイナ教徒宝石商6名とインド在住ジャイナ教徒宝石商5名へのインタビュー調査結果に基づいて、在日ジャイナ教徒のインドとの関係性と日本社会への適応のあり方を明らかにする。Ⅳではジャイナ教徒の若者5名へのインタビュー調査結果に基づいて、インドとどのようなトランスナショナルな関係を形成して育ち、親の背景にあるインド文化を継承し、日本社会に適応しているのかを明らかにする。Ⅴでは、御徒町在住ジャイナ教の生活をトランスナショナルな領域に位置づけ直し、日本社会への適応のあり方を世代間の違いに着目して考察する。

Ⅰ 在日インド人の歴史的背景と先行研究における位置づけ

本章では、インド人の日本への移住の歴史的背景を簡略に述べた後、在日インド人に関する先行研究とトランスナショナリズムに関する先行研究を整理し、本論の位置づけを明らかにする。

1 歴史的背景

開国後ほどなくして日印間貿易の拠点となった横浜に続いて、1885年頃にインドとの貿易を開始する神戸にも徐々にインド人貿易商が滞在するようになった。第一次世界大戦の影響

表1 親世代インタビュー対象者の属性表

事例	性別	年齢	出身地	来日年	学歴	職業	父親の職業	家族構成
A	女性	45歳	ムンバイ	1995年	大卒	夫と共に宝石商	部品工場経営者	インド人夫(宝石商), 息子2人(アメリカとインド在住)
B	男性	60歳	アジュメール	1987年	大学院卒	宝石商	銀行員	インド人妻, 息子2人(2人共イギリス在住)
C	男性	50歳	ニューデリー	1990年	大卒	宝石商	国会勤務	日本人妻, 息子1人(インド留学中)
D	男性	55歳	ジャイプール	1996年	大卒	宝石商	宝石商	インド人妻, 息子2人(長男(事例G)同居, 次男(事例H)ロンドン留学中)
E	男性	60歳	ジャイプール	1990年	大卒	宝石商	宝石商	インド人妻, 息子2人(長男香港在住, 次男(事例D)同居)
F	女性	53歳	ジャイプール	1992年	大学院卒	主婦, ヨガ講師	綿工場経営者	インド人夫(宝石商), 娘(東京で就職), 息子(東京の大学の大学生)

出典：筆者作成

表2 インド在住インタビュー対象者の属性表

事例	性別	年齢	出身地	学歴	職業	父親の職業	家族構成
G	男性	49歳	ニューデリー	大学院卒	宝石商	映画製作	妻, 娘, 息子(香港留学中)
H	女性	40代	ニューデリー	大学卒	宝石商	宝石商	夫, 娘
I (事例Dの弟)	男性	48歳	ジャイプール	大学院卒	宝石商	宝石商	妻, 娘2人, 息子
J (事例Eの弟)	男性	60代	ジャイプール	専門学校卒	宝石商	宝石商	兄(事例K)と同居
K (事例Eの兄)	男性	70代	ジャイプール	大学卒	宝石商	宝石商	弟(事例J)と同居

出典：筆者作成

表3 若者世代インタビュー対象者の属性表

事例	性別	年齢	来日年齢	家族構成	父親の職業	父親の出身地	高校まで	大学	職業
L	男性	21歳	0歳	両親(父親は事例D), 兄(事例M)	宝石商	ジャイプール	日本の学校	ロンドン	大学生
M	男性	37歳	18歳	両親(父親は事例D), 弟(事例L)	宝石商	ジャイプール	インドの寮制学校	東京(日本語)	会社員
N	男性	21歳	0歳	両親, 妹	宝石商	ムンバイ	インターナショナル・スクール	東京(英語コース)	大学生
O	男性	36歳	8歳	両親, 兄(インド在住), 妻(日本人)	宝石商	ムンバイ	インターナショナル・スクール	アメリカ	会社員
P	男性	27歳	1歳	両親(父親は事例E), 兄(香港在住), 妻(インド人)	宝石商	ジャイプール	インターナショナル・スクール	カナダ	宝石商

出典：筆者作成

によるインドに対する輸出急増と、1923年9月に発生した関東大震災で横浜のインド人たちは、親類や知人の住む神戸や大阪に避難したので、兵庫県のインド人人口は増加した。そして、彼らのほとんどが後に横浜に定住することなく神戸に定住することになった。1939年には第二次世界大戦が勃発し、英領印度政府から貿易を制限する政策が打ち出されたために、インド人商人をとりまく状況は悪化した。神戸を中心に在日インド人は続々と商社を閉鎖し、ごく僅かな人数を除き日本を離れて国外に拠点を移した [村瀬 2013: 154-155]。

戦後は再びインド人商人が来日した。戦後流入したインド人は、戦争中に神戸から一時的に海外へ移住していた者、あるいは戦前からの居住者を頼ってきた者、そして、真珠ビジネスに従事したジャイナ教徒であった [南・澤 2005: 7]。戦後のビジネスの拠点は大阪に移り、それに伴って神戸のインド人たちの商社の多くも大阪に移設されたが、神戸に暮らしてきたインド人は事務所と住居を分離して神戸に居住し続けた [村瀬 2013: 156]。兵庫県のインド人人口は、戦争直前にピークがあり600人台に達し、戦後一旦減少したが、1970年には600人台に回復した [南・澤 2005: 7]。2018年6月法務省在留外国人統計によると兵庫県在住のインド人は1,526人で、2006年の1,287人から増加してはいるものの、首都圏の増加率よりかなり低い [法務省在留外国人統計 HP 2018]。

首都圏在住インド人人口が増加したのは、特に1990年代以降のインドの経済自由化に伴い、コンピューター「2000年問題」によってインド人技術者の需要が高まったことによる。2000年森首相（当時）のインド訪問を契機に、2001年にIT技術者へのビザの発給が緩和されたことにより、IT技術者の首都圏への流入が急増したからである。

2000年代から増加した若いIT技術者は、子どもを日本の学校や学費の高い国際学校に通わせることを好まず、インドに家族を残し単身で日本に来る者が多かった。子どもの教育問題が解決できれば家族で来日できることから、インドの教育課程に沿ったインド人学校の設立が望まれるようになった。在日歴が長く事業で成功したインド人約20人が資金を出し合って、2004年にインディアン・インターナショナル・スクール・イン・ジャパン (India International School in Japan : 以下 IISJ と略称) が設立された。2006年にはシンガポールに本校のあるグローバル・インターナショナル・スクール・イン・ジャパン (Global Indian International School in Japan : 以下 GIIS と略称) が開校した。これらインド人学校は、インドの後期中等教育中央審議会 (The Central Board of Secondary Education) が実施する後期中等教育修了試験に合格できるカリキュラムを組んでいるので、日本に数年滞在しインドに帰国しても、子どもはインド全州の学校に入学できるので家族で来日する者が増えた。

2019年1月東京都外国人統計によると、東京都在住インド人12,130人の内、最も人口が多いのは江戸川区で4,148人、次いで江東区の2,065人、第三位が台東区の713人である [東

京都外国人人口統計 HP 2019]。江戸川区のインド人人口が多いのは、2000年代流入した IT 技術者が、江戸川区西葛西に集住地区を形成したからである¹⁾。

2 先行研究の整理と本論の位置づけ

在日インド人に関する先行研究は少なく、開国からの集住地である神戸の歴史的展開を追った南埜・澤の研究 [2005] や神戸で真珠ビジネスを営むジャイナ教徒についての研究 [村瀬 2013] はあるが、ほとんどが 2000 年代以降増加したインド人 IT 技術者を対象にしている研究 [例えば、周・藤田 2007, 澤・南埜 2009, 小山田 2007] である。首都圏に増加した在日インド人は大学教育を受けたエリート層の 40 代以下の IT 技術者が多い。小山田 [2007] は西葛西に集住する IT 技術者家族を対象とするフィールドワークに基づいて、その生活世界を描き出している。2000 年に江戸川インド人会 (ICE : Indian Community of Edogawa) という地域 SNS のネットワークが結成され、それを基盤にディワリ祭りやホーリー祭りを開催して、地域住民にインド文化を紹介し交流する場となっている。インド人女性へのインタビューも実施し、家族・親族のつながり、出身や宗教の共有、夫の職場の友人等を通してインド人同士の個人レベルの付き合いはあるが、地元の日本人とは深い交流をもっていないことが指摘されている [小山田 2007]。また、澤 [2018] は、先進工業国へと越境するインド系移民における社会と空間の再編成に関する分析の中で、東京のインド人社会にも言及している。宗教・母語・出身大学・ナショナルリティが重層性をもった東京のインド人としてアイデンティティが形成される過程を歴史的に後づけ、インド人社会の形成にインターネットが重要な役割を果たしてきたことを明らかにしている [澤 2018]。

2000 年代からの若い IT 技術者の増加に伴い 2000 年代初めに設立されたインド人学校を対象とした研究としては、大谷の研究 [2008] と徐の研究 [2014] がある。また宗教実践に焦点を当てた研究として、東は東京のスィク寺院でのフィールドワークに基づいて、寺院での信仰や慣習の実践が「東京のグルデュワーラーに集うパンジャービー・スィク」としてのアイデンティティを形成してきたことを明らかにした [東 2009]。ワダワ [Wadhwa 2016] は東京都在住インド人 78 名へのインタビューと寺院での参与観察に基づいて、スィク寺院とクリシュナ寺院、ジャイナ寺院での宗教実践が東京在住インド人の生活やアイデンティティ形成において重要な役割を果たしていると述べている。寺院での宗教実践は、家族やコミュニティの連帯を強化しているだけでなく、楽しみの一つでもあり、宗教、出身地、職業等の違いを超えたインド人としてのアイデンティティを醸成していると指摘している

1) 西葛西にインド人が集住した理由としては、IT 企業のある都心への交通アクセスが便利なこと、新興のベッドタウンで昔からの地域住民との摩擦が少ないこと、また国籍を問わず、礼金等がない旧公団住宅 (UR 賃貸住宅) の多くが買上社宅になったこと、さらに荒川がガンジス川に似ていること、インドレストラン、インド食料店等、インド人学校があることがあげられる [周・藤田 2007]。

[Wadhwa 2016]。

在日ジャイナ教徒については、神戸在住インド人の研究[南埜・澤 2005]と村瀬の研究[2013]で言及されている。神戸在住インド人は、シンディ（シンド州出身・ヒンドゥー教徒）＝繊維・電化製品を扱う商人、パンジャビー（パンジャブ州出身・シク教徒）＝雑貨・自動車部品などを扱う商人、グジャラティ（グジャラート州出身・ジャイナ教徒）＝真珠商人（神戸市中央区北野に集住）の3つの商人グループから構成され、グループごとに宗教施設を核とした強固で、かつやや排他的なローカルネットワークを形成していることが明らかにされている[南埜・澤 2005: 10]。村瀬は、神戸で真珠ビジネスを営むジャイナ教徒男性1名へのインタビューに基づいて、神戸在住のジャイナ教徒のほとんどが真珠商であり、ジェイナ寺院を建立し、お互いが顔見知りの強固なコミュニティを形成してきたと述べている[村瀬 2013]。

また、筆者は、在日インド人家族にみる多様な学校選択の背後にある諸要因と、その後の子どもの進路選択や文化的アイデンティティのあり方を明らかにし、子どもの学校選択が移民家族におけるトランスナショナルリズムに及ぼす影響を検討した[山本 2016]。拙論では「インド人学校に子どもを通わせるIT技術者」という主流の言説の影響でこれまで着目されてこなかった、それ以前から日本に在住しているインド人家族を対象とすることによって、多様な学校選択のあり方に光を当てた。高校までの学校の選択肢は、インド人学校、日本の公立学校やインターナショナル・スクール、そしてインドの私立学校であった。7家族の事例の分析から、学校選択の背後にある3つの要因として、教授語、家庭の経済的状況、そしてジェンダーを析出した。そして、高校卒業後の若者のライフストーリーの分析から、親による高校までの学校選択は、若者の高校卒業後の進路選択や文化的アイデンティティのあり方を規定するものでなく、その後の若者の主体的な進路選択によって家族のトランスナショナルな関係は再編され、継時的に変化していることを指摘した[山本 2016]。

上記の拙論ではインド人家族の学校選択に焦点を当ててトランスナショナルリズムを検討した[山本 2016]。本論では在日インド人の中でもジャイナ教徒を取り上げて、インドとの関係性については宝石ビジネスと親族との結びつきを中心に検討する。なお、本論では、トランスナショナルリズムとは「複数の国の国境を越え、長期間継続して頻繁にみられる、移民の多元的帰属ないし多元的ネットワークをめぐる諸現象」とする上杉の定義[上杉 2004: 29-30]に依拠する。

在日外国人に関するトランスナショナルリズムについては、在日パキスタン人についての福田[2015]の研究がある。福田は、彼らが中古車貿易業を営むために世界各国に配置した親族ネットワークを活用し、日本人家族を海外に移住させ、国境を越えて複数の生活拠点を維持し選択する過程を分析している[福田 2015]。また、三田[2009]は、戦前に「出稼ぎ」

としてブラジルに渡った日本人が1990年入管法改正によって「デカセギ」として来日するという両国間の移動の百年史を検討している。またツダは、親の出身地である日本に出稼ぎにきた日系ブラジル人が、日本で部外者として扱われていることを検討している [Tsuda 2003]。在日コリアンについては、宮下による在日コリアン寺院にみる韓国と結びついたトランスナショナルな宗教的实践についての研究がある [宮下 2009]。次世代に焦点を当てた研究としては、山之内 [2016] が、リーマンショック以降にブラジルに帰還した日系人の若者のエスニック・アイデンティティについて検討している。

移民次世代のトランスナショナリズムについての先行研究は、アメリカの移民二世代の事例において、親の出身国との関係性（例えば、訪問回数、送金、「ホーム」の意識）が二世代のアイデンティティ形成や同化の程度にどのように関連しているのかについての研究 [Levitt and Waters (eds.) 2002] が引き金になって、ヨーロッパの移民二世代も対象に研究されてきた [ex. Wessendorf]。本論は在日ジャイナ教徒を取り上げ、日本で強固なコミュニティを形成しながらインドとの間でのトランスナショナルなビジネスに携わる親世代の日本社会への適応のあり方を検討し、さらに次世代と比較する。これによって、西欧諸国の移民二世代にみるトランスナショナリズムに関する議論に、移住先で親世代の形成した強固なコミュニティと親の出身国の親族との結びつきが、どのように次世代の移住先への適応や文化的アイデンティティの保持と関連しているかという事例を提示することによって貢献したい。

II 御徒町におけるジャイナ教徒コミュニティの形成

本章では、第一にジャイナ教の概要、第二に宝飾の街としての御徒町の形成過程とインド人宝石商の来日、第三にジャイナ寺院の建立、第四にジャイナ教徒の宗教的コミュニティであるトウキョウ・ジェイン・サンガ (Tokyo Jain Sangh) の形成について検討し、御徒町にジャイナ教徒による強固なコミュニティが形成されていることを明らかにする。

1 ジャイナ教とは

ジャイナ教について解説している上田 [2017] は、「ジャイナ教とは何か」という問いにひと言で答えるとするならば、「ジャイナ教とは、ジナ（マハーヴィーラ）の教えである」ということができるし、「ジャイナ教徒とはジナの教えに従って生きる人々のことである」ということができる」と述べている。しかし、ジナの生涯やその教えの内容は、時代によっても、地域によっても、分派によっても様々であるため、ジャイナ教を一括りにして語る 것이難しいのが現状である [上田 2017: 7-8]。歴史的に見れば、紀元1世紀以来、ジャイナ教は

白衣派（シュヴェーターンバラ派，修行者に白衣を着ることを許す派）と空衣派（ディガンバラ派，修行者は不摂生と無所有を実践するために裸である）の二派に分裂している〔渡辺 2006: 9〕。

ジャイナ教を信奉する人々は，ヒンドゥー教における神々を崇拝することはなく，ヒンドゥー教的な，バラモンを頂点とした宗教的序列に与しないという意味において両者は異なる。紀元前 1500 年頃からインド亜大陸に進出してきたと考えられるアーリア人の伝えるヴェーダ聖典の権威と，それに基づくバラモンを頂点とする宗教的な序列によって構成される集団が，現在ヒンドゥー教と一括りにされている集団である。ジャイナ教は初期の時代から，ヴェーダ聖典の権威を否定することを大きな特徴としていて，その点は仏教と似ている。仏教とジャイナ教は反バラモン主義的な思想的背景である「シュラナマ（沙門）」と呼ばれる生き方を共有している〔上田 2017: 10〕。

ジャイナ教が目指すのは，業（カルマ）の蓄積によって輪廻転生の循環におちいつている魂（アトーン）を解き放ち，永遠の至福（解脱）に至ることである〔村瀬 2013: 162〕。ジャイナ教の指導者マハーヴィーラの基本的な実践倫理は，以下の 5 つである。1. 生きものを殺すな（アヒンサー），2. 偽りのことばを語るな，3. 与えられないものを取るな，4. 淫事を行うな，5. なにもものも所有するな〔渡辺 2006: 169-170〕。そして，ジャイナ教在家信者の食生活は，一般的な肉食主義とは異なり，「不殺生の徹底」によって導かれた独特の原理によって「食べられるべきではないもの」がリスト化されている〔上田 2017: 43-44〕。

2011 年の国勢調査によると，ジャイナ教徒の人口は，インドの総人口約 12 億人中，約 0.4%，450 万人ほどである。ヒンドゥー教徒は 79.8%，イスラム教は 14.2%，キリスト教徒は 2.3%，シク教徒は 1.72%，仏教徒は 0.7% である。ジャイナ教は，仏教とは異なりインド以外にはほとんど伝わらず，現在，グジャラート州やラジャスターン州といった西部インド，そしてマハラシュートラ州やカルナータ州などの南部に多く分布している〔上田 2017: 5〕。そして，ジャイナ教徒，特に女性の識字率や学歴は，インドの中ではとくに抜きん出ている。2011 年の国勢調査によると，ジャイナ教徒の識字率は 94.9% と非常に高く，インド全体の平均は 65.3% である。ジャイナ教徒の女性の識字率は 90% を超えているのに対して，インド女性の平均は 54% である〔上田 2017: 49〕。

2 「ジュエリータウンおかちまち」とインド人宝石商の来日

宝飾品の街としての御徒町のルーツは江戸時代にまで遡る。御徒町付近は，上野寛永寺，浅草寺をはじめとし，数え切れないほどの寺社があったため，仏具や銀器の飾り職人が多く集まってきた。また，台東区には古くは浅草，吉原，柳橋，黒門町，湯島，根津など，粹街，

色街が多くあり、かんざし、帯留めなどの小物を納めるビジネスの拠点として御徒町が便利であった。明治の中頃になると、指輪を製作、加工する業者が増え、やがて型を使用した量産技術が生まれ、宝飾品の街・御徒町のイメージがますます高まった。

第二次大戦後には、上野で米軍の兵士が時計やアクセサリーなどを売買しはじめ、この青空マーケットがやがてアメ横の母体になった。上野や御徒町はアメ横のバックヤードとして修理と仲買機能を果たすとともに、戦後いち早く1964年（昭和39年）春から時計・宝飾業者同士の交換会である「市」も行われるようになり、宝飾品取引の中心地としての地位を確立していった。1956年（昭和31年）に時計関連卸11社で結成した「仲御徒町問屋連盟」も御徒町が宝飾の街となったきっかけとなった〔日本唯一の宝石問屋街ジュエリータウンおかちまちHP〕。

1987年9月に「宝飾品問屋街・ジュエリータウンおかちまち（以下、JTOと略記する）」が創立され、現在に至っている。創設時には159社が加盟していた。設立の目的は、会員相互の親睦を図り、自主的経済活動の促進はもとより、会員の繁栄に共通する活動を行い、宝飾品問屋街として、国内はもとより世界にPRし、地域経済の発展に貢献することであった。翌年1988年には、通りの名称を「ダイヤモンド」、「ルビー」、「サファイア」、「エメラルド」、「ひすい」、「ガーネット」の6つの宝石の名前にすることが決定された。1988年の会員数は184社であったが、1995年には155社に減少し、その後の会員数についてはホームページに記載されていない。2017年には「ジュエリータウンおかちまち」は創立30周年を迎え、「JTO30年のあゆみ」が発行され、JTO創立30周年記念祝賀会には160名が参加した。特に防犯対策に力を入れ、2003年にいち早く街頭防犯カメラが設置された〔日本唯一の宝石問屋街ジュエリータウンおかちまちHP〕。

1990年頃から宝石問屋街御徒町にインド人宝石商が来日した。現在では御徒町のインド人宝石商は100社以上になっている。宝石を展示している店舗もあれば、ビルに事務所だけを構える会社もある。従業員は十数名から1名だけで営業している場合もあり、日本人従業員も雇っている。

在日インド人宝石商は、在日インド人宝石商協会（Indian Japan Jewelers' Association）を設立している。2017年にJTOに加盟していたインド人宝石商は2名だけであった。これはインド人宝石商にはインド人同士で宝石の貸し借りをするなどの仕事上のネットワークが確立されていて、日本人宝石商によるJTOに加入する必要性がないからだと考えられる。

筆者が2019年7月にインタビューを実施したD氏によると、現在在日インド人宝石商協会の会員数は約80社で、ジャイナ教徒による会社とヒンドゥー教徒による会社が半数ずつ加盟している。約80社の内の約50社は御徒町に位置する会社、約20社は山梨県甲府市に位置する会社、約10社は東京都世田谷区に位置する会社である。甲府市は古くから研磨宝飾産

業が盛んでありインド人宝石商が在住している。また東京都世田谷区には古くからインターナショナル・スクールがあるので、台東区にインド人学校が設立される前はインターナショナル・スクールの近くに住むインド人がいたからである。在日インド人宝石商は約160社であるので、半数はこの協会には入っていないことになる。現在、御徒町周辺に在住するインド人は約400人となり、その内ジャイナ教徒は200～250人で、他は主にヒンドゥー教徒である。

3 ジャイナ寺院の建立

在日インド人コミュニティは東京よりも神戸の方が歴史は長く、ジャイナ教徒は1950年頃から神戸に在住していた。筆者は、2016年10月に1980年に22歳でムンバイから神戸に移住して現在まで神戸に暮らしている60代ジャイナ教徒男性にインタビューを実施した。1960年頃に彼の祖父が神戸に移住し、その後従兄弟も移住し、神戸で真珠ビジネスを営んでいたが、従兄弟がインドに帰るので、彼が代わって来日した。来日以前はムンバイで宝石ビジネスに携わっていた。彼が来日した時、神戸のジャイナ教徒は約30世帯であったが、2016年には約50世帯であり、ほとんどが真珠ビジネスに携わっていると述べた。

1985年6月1日には日本で最初のジャイナ寺院であるバグワン・マハビールスワミ・ジェイン寺院 (Bhagwan Mahavira Swami Jain Temple) が神戸市中央区北野町に落成した。1984年にムンバイからマハーヴィーラの像を持ってきて、1984年4月に新しい寺院を建立のための儀礼 (Pauch Kalyanak Pratistha) が実施された。インドと同じような造りの大理石の建物でジャイナ教徒による献金で建立され、寺院を管理するだけでなく日常的儀礼や祈りを実施する僧侶がいる [Wadhwa 2016: 121]。建材の大理石はすべてインドから取り寄せられ、インドに滞在してジャイナ教建築を学んだ日本の業者が立てた [村瀬 2013: 152]。

東京のジャイナ寺院は、2000年頃御徒町に自ら所有する建物に家族の為の寺院として建立された。家族のための寺院であったので、神戸の寺院のような建立の為の儀礼は実施されなかったが、他のジャイナ教徒にもオープンにされた。寺院を所有する家族は親族も来日している大家族で、朝7時に寺院を開け、夜8時に閉め寺院の管理をしている [Wadhwa 2016: 122-123]。一家族の祈りの場所として建立されたジャイナ寺院ではあるが、他のジャイナ教徒にも開かれているので、首都圏在住ジャイナ教徒のコミュニティの核となった。

この寺院は、ジャイナ教徒達の献金で建立された神戸の大理石のジャイナ寺院のように外から見て寺院であることがわかることはない。他のビルと変わらない4階建てビルの3階が寺院である。1階で靴を脱いで、エレベーターで3階の寺院に上がる。寺院内の飲食は厳しく禁じられ、革製のベルトや鞆、財布などを持ち込むことができない。3.11の地震ではこの寺院も被害を受けたので、インドから持ってきた神様を神戸のジャイナ寺院に預け、2015年

に戻された [Wadhwa 2016: 122-123]。

ジャイナ教徒は毎朝仕事の前に寺院を訪れお祈りする人も多く、毎日約 50 人のジャイナ教徒が訪れる。派によっては寺院を訪れず、家で瞑想をすることを重視している人もいる。西葛西に集住する IT 技術者のジャイナ教徒はグジャラート出身者が多く、ジャイナ寺院の近くに引っ越してくる人が近年増えている。また、ジャイナ教徒が 1 年で一番盛大に祝う聖なる祭り (Paryushan) は、8 月終わりから 9 月にかけて 8 日間にわたって実施される。インドではこの 8 日間は仕事を休み、断食する人が多い。その中でもクライマックスであるマハーヴィーラ生誕祭 (Mahavir Janmavachan) は、ジャイナ寺院では狭いので、近くの公民館ホールを借りて実施され、毎年約 300 名のジャイナ教徒が集まる。

4 トウキョウ・ジェイン・サンガ (Tokyo Jain Sangh) の形成

筆者が 2019 年 7 月にインタビューを実施した E 氏は、トウキョウ・ジェイン・サンガ (Tokyo Jain Sangh) という御徒町周辺に居住するジャイナ教徒が中心になって設立した宗教コミュニティの創設者の一人である。1990 年に来日した E 氏は、来日数ヵ月後、父親が 1930 年代に来日し日本で生まれ育ったヒンディー語教師の自宅で、ジャイナ教徒 5、6 人と一緒に食事をするようになった。朝食を取りながら話し始めたが、例えば「食事を残すこと」「林檎を切ること」の宗教的意味について等、多岐にわたる宗教に関する話が途切れることなく夜まで続いた。こうした食事会をきっかけに、ジャイナ教徒によって宗教のことを話せる集まりを作ろうということになった。その後、メンバーの献金で様々な宗教に関わるイベントやスポーツイベントなどを組織するようになった。現在ではフェイスブックのサイトがあり、イベントを告知しているが、登録者は 425 人に増加している。全員がジャイナ教徒ではなく、約 2 割はヒन्दゥ教徒である。トウキョウ・ジェイン・サンガに関わっているインド人は、御徒町周辺に居住するジャイナ教徒であり、ほとんどが宝石商であり仕事上のつながりもある。ジャイナ寺院で会うこともあり、イベントで少なくとも年に数回は顔を合わせるのをお互いに顔見知りである。ジャイナ教に関するイベントだけではなく、インドの最大の祭りであるディワリ等にも参加している。

40 代後半女性 A 氏によると、ジャイナ教徒女性が 5～15 名程集まって、月に 2 回持ち回りで各自宅において瞑想教室を開催している。以前は瞑想だけではなく食事会も開催していたが、食事会を開催するのは大変なので、現在は瞑想だけを実施している。瞑想教室の開催を告知するための、インド人が一番使用している SNS である Whatsapp には約 80 名のジャイナ教徒女性が登録している。また、数名の子どもを集めて、ジャイナ教の教えを伝える教室を自宅で開くこともあるが、これを知らせる他の Whatsapp のグループもある。子ども向けのヨガ教室も開催されている。

以上から、御徒町周辺に在住するジャイナ教徒は、ジャイナ寺院を核として、宝石ビジネス上のつながりだけではなく、宗教イベントやスポーツ大会を開催し、SNSで多層的に結びつき、お互いが顔見知りであるという強固なコミュニティを形成しているといえる。

III 親世代の場合

本章では親世代に焦点を当てて、第一に宝石商という職業について、第二にインドの親族とのつながりについて、第三に日本社会への適応のあり方を検討する。

1 宝石商としてのジャイナ教徒

ジャイナ教の「アヒンサー」の戒律は仕事の選択にも影響しているといえる。ジャイナ教徒は、漁業、屠殺業といった動物を殺す仕事や、軍人、武器職人など戦争に関連する仕事、小さな虫を傷つけたり殺したりする可能性のある農業や林業、車で生きものを殺す可能性のある運送業等には就かない。一般的にジャイナ教徒の就く職業は、宝石商、金融業、教師が多く、最近ではIT技術者も増えている[上林 2007: 24]。インテリ層が多く、比較的高収入で、インド全人口に占める割合は0.4%にすぎないが、インド全個人所得税の約20%を納めている[上杉 2007: 1]。

在日ジャイナ教徒の男性はほとんど宝石商であり、永住権を取得している²⁾。最初来日した時は食事に窮して、C氏のように宝石商のかたわら完全菜食インドレストランを経営する人もいる。ジャイナ教徒女性はA氏のように夫と共に宝石商として働いている人もいれば、F氏のように主婦であり副業としてヨガ講師や翻訳業に携わる人もいる。大学院卒のF氏によれば、日本でインド人女性は資格に見合った職業を得ることは非常に難しいとのことであった。

インドではジャイナ教徒女性は、G氏の妻のように夫の宝石商を手伝う者もいれば、I氏の妻のような主婦もいる。また、H氏のように代々宝石商の家系で、父親に働くことを強く反対されたが、強硬に家業である宝石商を継ぎ、弟と宝石店を共同経営している女性もいる。G氏の場合、息子はエンジニアになろうとしていて、現在大学生の娘が宝石商を継ぐために、学業のかたわら父親の店で仕事を学んでいる。宝石商という職業は男性だけではなく女性も継ぐといえる。

御徒町在住のジャイナ教徒宝石商の出身地は、ムンバイとジャイプールが多い。ムンバイはダイヤモンド加工業が、ジャイプールはルビーやオパールといった色石加工業が盛んで、インド在住の宝石商もこの2地域に多い。ところで、インドのすべての産業の中でもっとも

2) 永住者は在日外国人の28.8%を占めている[法務省在留外国人統計 HP 2018]。

国際競争力があるのは、ITでもバイオ・医療品産業でもなく、ダイヤモンド加工業である〔近藤 2007: 141〕。インドは、ダイヤモンド原石を輸入して、カット・研磨して輸出するビジネスで圧倒的な地位を築いており、世界の研磨ダイヤモンド取引市場に占めるインドのシェアは金額ベースで55%、数量ベースでは92%に及ぶ。インドの宝石・宝飾品の輸出額は、2005年度は167億ドルとインドの輸出全体の2割に及び、その7割強はダイヤモンドが占めている。インドのダイヤモンド産業のスタイルは、特定ファミリー間の信用によって輸入された原石を、安価な労賃を武器に人海戦術で研磨・加工するというものである。ダイヤモンド取引に関わっているのは、グジャラート州のパランプール出身のジャイナ教徒のコミュニティが中心である。

ダイヤモンド加工業の地域はグジャラート州とマハラシュートラ州に集中しており、とくにグジャラート州はダイヤモンド加工の8割を占めている。その中心地ストラでは、1960年代にダイヤモンド加工業が起り、1970年代から輸出関連企業の集中するムンバイに近いこともあって、盛んになった。インドでダイヤモンドのカット・研磨に従事している職人の数は、130万人に及び、加工の拠点は35,000カ所もあり、その大部分が小規模な非組織部門である〔近藤 2007〕。

筆者がインタビューを実施したジャイプール在住のI氏とD氏、K氏は、色石の原石をアフリカや東南アジアなどから輸入して加工している。ニューデリー在住のG氏は、既に加工された原石をインドで買ったりバンコクに買い付けにいたりして、それを使って店舗に併設された作業所で宝飾品を作製して主にインド人卸売業者に販売している。H氏は、自社工場で、ダイヤモンドや色石の原石をアフリカやブラジルなどから輸入し加工し、それで宝飾品を作成して、インドだけではなく海外の卸売業者や個人にも販売している。

御徒町在住の宝石商は、インドで加工されたダイヤモンドや色石を輸入して日本人卸売業者に販売していたり、インドにダイヤモンドや色石の自社加工工場を保持し輸入していたりしている。インドで作製された宝飾品は日本人の好みに合わないので、インドで作製された宝飾品を輸入する場合は少ない。御徒町在住インド人宝石商同士の結びつきは強く、仕事上の情報交換をし、お客の好みの在庫がない場合は融通し合うなど、お互いに助け合っている。

2 インドの親族との結びつき

ジャイナ教徒宝石商は、何代にも亘って宝石商を受け継ぎ、親族がほとんど宝石商である場合も多い。家業として宝石商を継承しているジャイナ教徒宝石商は、10代前半から父親の仕事を見て学んでいる。父親が他の仕事に就いていた場合でも親族には必ず宝石商がいるので、宝石商という仕事は身近で弟子入りしたりして仕事を学ぶ。ここでは、ジャイプール在住の親族にもインタビューをしたD氏とE氏の場合を取り上げて、御徒町在住宝石商がイン

ド在住の親族とどのように結びついているのかを検討したい。

D氏は、母方祖父の家系が200年前から宝石商であった。D氏の母方祖父は、E氏の祖父の兄弟であるので、D氏とE氏は遠い親戚関係にある。D氏の父方祖父はコルカタで織維の商売をしていたが上手くいかずジャイプールに移住した。両親はジャイプールで結婚し、父親は代々宝石商の家系である母方親族の助けを借りて宝石商を始めた。D氏は男性4人、女性1人の5人兄弟の上から4番目である。男の兄弟4人は全員宝石商で、姉の夫も宝石商である。E氏の二人の息子(L氏とM氏)は宝石商ではないが、他の兄弟の息子達は全員宝石商である。ニューデリーにいた亡き長兄の息子二人の内一人はニューデリー、もう一人は御徒町で宝石商を営んでいる。E氏は御徒町在住の甥と最初は一緒にビジネスをしていたが、甥は後に独立し今でもサポートしている。兄弟2人とその家族はジャイプール在住である。

D氏はジャイプールで加工された色石を輸入して、日本人卸売業者に販売している。弟であるジャイプール在住のI氏は、色石の原石を研磨加工する工場を経営しているが、E氏はI氏の工場からだけではなく、お客の求めに応じてジャイプールの他の工場からもブローカーを通じて色石を輸入している。ジャイプール在住の兄は工場を持たず、ブローカーとして働いている。D氏はお客の注文に合う色石を買い付ける必要のある時はジャイプールを訪れていて、ジャイプール滞在中は兄弟に会う。

E氏の家系は500年前から宝石商を継承してきた。カシミール、ニューデリー、ミャンマー、カルカッタで宝石ビジネスをしていたが、今は亡きE氏の父親が色石の加工工場をジャイプールに設立した。当時はラジャスターン州に鉱山を所持し、鉱山から原石を掘って工場加工していた。E氏は12、3歳の頃から父親の仕事を見て学んでいた。父親は、昔から日本人宝石商とつながりがあり、来日したこともあったので、E氏の来日時には、父親の知り合いの日本人宝石商に助けられた。E氏は男性7人、女性4人の11人兄弟の上から8番目である。男性7人とその息子達は全員宝石商である。E氏の兄弟であるジャイプール在住のJ氏とK氏は、世界中のバイヤーから原石を買って、共同で営む工場で色石やダイヤモンドを研磨加工している。J氏とK氏は独身で、J氏は御徒町に8年間、K氏は1年半神戸に住んでいたこともあったが、現在はジャイプールに戻っている。他の兄弟の1人はムンバイ、1人はアメリカ、その他はジャイプールに住んでいる。

E氏が御徒町で経営する会社では、ムンバイ、香港やベルギーから加工したダイヤモンドや色石を輸入して、日本人業者に販売するのがビジネスの中心である。香港とアメリカにも支社がある。E氏の長男は香港支社で、次男P氏はE氏と一緒に、宝石商として働いている。E氏の会社は、ジャイプールの兄弟の営む工場の色石の輸入がビジネスの中心ではないが、E氏は仕事でよくジャイプールに滞在し、兄弟に会っている。

以上、何世代にもわたる宝石商で親族がほとんど宝石商であるD氏とE氏の場合、ジャイ

プール在住の兄弟とはビジネス上では緩く結びつきお互いにサポートし合う関係であることがわかった。筆者はジャイプール在住の兄弟の経営する工場で加工された色石を輸入販売するのが、御徒町在住の宝石商のビジネスの中心であると考えていたが、実際はそうではなかった。そして、D氏とE氏は、ビジネスだけではなく、夏休みと冬休みには半月から1か月間ジャイプールの親族宅に滞在し、来日後もジャイプール在住の親族と密接な関係を保っていた。さらに、D氏の場合、ジャイプール在住の妻の母親が毎年1、2か月間来日しD氏宅に滞在していた。

また、D氏とE氏以外の御徒町在住宝石商は、兄弟がインドに原石の加工工場を保持していない。しかし、インドの兄弟や親族との関係は、D氏やE氏と同じように密接であり、それは兄弟だけではなく姉妹、あるいは妻側の親族でも同様であった。南インドには母系原理を採用する部族が混在しているが、インドは父系原理を優先するといわれている。家族の理想型は、男性家長と妻と未婚の子どもたち、家長の兄弟や息子とその妻子が一つの家に暮らす大家族制である [杉本 2010: 35]。しかしながら、インドの親族との結びつきには、父系親族の方が密接であるということではなかった。御徒町在住の宝石商は、インド在住の親族とはビジネス上の取引で結びついているというよりは、ビジネス関係でインドを訪問することも多く、個人的関係において密接な関係を保持しているといえる。リー [Lee 2011] は、オーストリアのトンガ系移民が送金によってトンガと結びついていたことを明らかにしたが、在日ジャイナ教徒は送金によってインドと結びつくことはなかった。

3 日本社会への適応のあり方

では、御徒町在住ジャイナ教徒は日本社会にどのように適応しているのだろうか。1980年代後半から1990年代前半に来日した彼らがまず困ったのは、食事と住居であった。食事に関しては、食品の包装紙に記載されている日本語が理解できないので食材に何が含まれているのかわからず、食事に関して規制の厳しい菜食主義であるジャイナ教徒は、インドから食材を輸入し、数人で一緒に料理して食べていた。A氏はインドからコックを連れてきていた。外食はできなかったので、国内出張の時はとても困ったという。また移住当時は御徒町には外国人が借りられる物件がなく、B氏は職場から離れた外国人保有の小さなアパートを借りてインドで結婚をした妻を呼び寄せて暮らした。

A氏はたまたま近所に住んでいた日本人男性に親切にしてもらい日本語を教えてもらい、夫の病気の為に宝石店が倒産した時も、その日本人男性に助けてもらい宝石店を再オープンできた。宝石店に日本人スタッフを雇う場合もあり、顧客である日本人や、近隣に住んでいる日本人と親しくなっている場合もある。しかし、ほとんどの場合はインド人同士でビジネス上でも生活の上でも助け合っていて、インド人との関係の方が日本人との関係よりも密接で

ある。

インタビュー対象者全員が、日本は安全かつ清潔であり、日本人は礼儀正しく親切であると肯定的に捉えていた。C氏は最初来日した時はパラダイスだと思ったと語った。F氏以外の親世代のインタビュー対象者は、日本語で会話はできるが、インドの大学で日本語を学んだC氏以外は日本語の読み書きはできない。B氏とC氏は、日本文化とインド文化は違いが大きく、自分たちは日本文化に慣れ、例えばインド人のように路上で大きな声で話したりすることはなく、日本人のように振舞えるという。また、ビジネス上での知り合いや近隣に住む日本人の友人もいる。しかしながら、日本人女性と結婚したC氏でさえ、自分は日本で死んでも、日本人は自分たちのように肌の色の違う人間を絶対に同胞として受け入れないと語った。

御徒町在住ジャイナ教徒宝石商は、宗教とビジネスを核として強固なコミュニティを形成している。そして、インドの親族とは、ビジネス上の結びつきだけではない密接なトランスナショナルな関係を保持していた。日本社会を肯定的に捉えながらも、御徒町在住のインド人コミュニティと出身地であるインドとの間のトランスナショナルな空間で生き、インド人同士で助け合って、日本人とはそれ程密接に関わることなく日本社会に適応しているといえる。

IV 若者世代の場合

本章では、第一に筆者がインタビューをした次世代の若者にみる学校選択や職業選択、そして結婚について述べ、第二にインドの親族とのつながりについて、第三に日本社会への適応のあり方を検討する。

1 学校・職業・結婚

在日ジャイナ教徒の次世代は、30代後半が最年長者であり、日本で育った37歳のM氏は、幼い頃はあまりインド人の子どもはいなかったと語った。10歳後半から20代の若者は人数が多くなる。次世代のインタビュー対象者5名（表3参照）の内、L氏は幼稚園から高校まで日本語を教授語とする学校で日本人と同様の教育を受け、現在はロンドンの大学に留学している。M氏はジャイプールの寮制学校に入り高校卒業後来日し、日本語学校を経て日本の大学を卒業している。N氏とO氏、P氏は、日本の地元の保育園に通った後、小学校から高校までインターナショナル・スクールに通っている。P氏はインド文化に慣れた方がよいという父親の勧めで小学校1年生から3年生までは母親と兄と一緒にインドに戻り、インドで学校に通った。N氏は日本の大学の英語コースに進み、O氏はアメリカの大学をP氏はカナダの大学をそれぞれ卒業している。L氏のように日本の学校に通ったインド人は極少ない。宝石商の親世代は経済的に比較的裕福であり、学費が年間300万円近くするインターナシヨ

ナル・スクールに子どもを通わせることも可能であった。

職業に関しては、L氏とN氏は大学生で、現在のところ宝石商になろうとは考えていない。M氏は10代の頃インドで宝石商の仕事を手伝ったことがあったが、自分には合わなかったもので、現在は日本の証券会社で働いている。O氏はアメリカの大学卒業後、アメリカで環境保全NPOにおいて数年間働き、日本に帰国後はIT関連会社で働いている。兄はアメリカの大学卒業後日本で父親の宝石ビジネスを手伝っていたことがあったが、現在はインドで宝石とは関係のない仕事に就いている。

P氏は、カナダの大学を卒業後、日本語が話せるから可能性は日本にあると考えて帰国し、インドに本社のあるIT関連会社の東京支社で1年間働いた。しかし、仕事内容が給料に見合わないと思い、父親の仕事である宝石商の方が良いと考えた。ムンバイの知り合いの宝石商の元で3ヶ月宝石商になるための修行をした後、父親の元で宝石商の仕事を学び、現在は宝石商として父親と一緒に働いている。兄は大学卒業後ムンバイで宝石商になるための勉強をした後、現在は父親の会社の香港支社で働いている。P氏は、兄が宝石商になったので、父親からは宝石商になれとは言われなかったと述べた。

既婚者はO氏とP氏の二人である。O氏は、1年前に仕事を通して知り合った日本人女性と結婚をし、現在はO氏の両親と同居している。結婚式はまだ挙げていない。P氏はジャイナ教徒の女性とインドでお見合い結婚をし、来日した妻と共にP氏の両親と同居している。ジャイプールで600人を招待して結婚式を挙げた。

2 インドの親族との結びつき

8歳で来日するまでムンバイで育ったO氏は、生まれた当初は曾祖父に繋がる親族全員30人位と一緒に住んでいた。後に祖父が近くに家を建て、祖父母や両親、叔父叔母など10人位で暮らした。来日したのは両親だけで、他の親族はインドにいて、来日後も夏休みに3ヶ月間、冬休みには1ヶ月間ムンバイに帰り、インドに行くとき「家に帰ってきた」という気持ちになった。インド滞在中は親族の家に滞在していた。M氏にとって、叔父叔母の子どもは「いところ」ではなく「兄弟」であり、叔父叔母は「親戚」ではなく「ファミリー」であると語った。アメリカの大学に留学後にはインドを訪れる回数が減り、大学卒業後はあまり訪問しなくなったが、その気持ちは今も変わらないと語った。

18歳までインドの寮制の学校に通ったM氏は、近くに母方祖母が住み、休みにはよく訪れていた。M氏が来日後には、祖母は年に1度は2か月くらいM氏が両親と暮らす御徒町の自宅に滞在し密接な関係を保っている。L氏とN氏、P氏は大学生になるまでは、夏休みに2か月間、冬休みに半月から1ヶ月間は親の出身地を訪問している。インドでは親族の家に泊まり、いとこ達と遊んだりしていた。そして、インド滞在中に一度は300人から400人

くらいの親族が集まってパーティーが開かれていたので、遠い親戚でも顔は知っている。

日本で生まれ育った現在大学生のN氏とL氏は、インドに滞在していると日本に帰りたくなり、日本がホームであると語った。他の3名はインドも日本もどちらかがホームであるという意識はなく、どちらも好きであると述べた。

3 インド文化の保持と日本社会への適応のあり方

5名ともジャイナ教徒であるが、親世代と比べたら信仰心は篤くなく、毎日瞑想し寺院に行く者はおらず、年に数回寺院のイベントに参加するだけである。食生活については、M氏以外は肉食主義であるが、親には内緒で飲酒をする場合もあると述べた。M氏は来日後に食生活が変化し、肉食主義ではなくなり現在では牛肉も食べている。

言語については、ヒンディー語の読み書きができるのは、18歳までインドの学校に通ったM氏だけで、他の4名の場合、会話はできるが読み書きはあまりできない。O氏は両親とはグジャラティ語で会話している。高校まで日本語を教授語とする学校に通ったL氏のみ、日本人と同じレベルの日本語能力があり、英語の会話も読み書きもできる。インターナショナル・スクールに通ったN氏とP氏、O氏は、日本語での会話は問題ないが、読み書きはほとんどできず第一言語は英語である。18歳で来日したM氏は、来日後に日本語を勉強したのにもかかわらず、会話だけではなくある程度読み書きもできる。M氏は、ヒンディー語と英語、日本語が達者であることによって、日本企業への就職が有利であった。

友人関係について、N氏は御徒町在住の日本人の友人とは保育園やサッカーチームや野球チームで知りあい、インターナショナル・スクールでも日本人の友人の方が多かったと述べた。御徒町在住のインド人の友人は、幼い頃から寺院のイベント等で会うので顔見知りであるが、学校での友人との関わりの方が密接であった。御徒町在住のインド人の若者は海外の大学に留学する者が多く、夏休みに帰省した時に遊ぶようになり、高校までよりも大学入学以降に関係が密接になった。現在通っている日本の大学の英語プログラムの同級生は、外国人か帰国子女でインド人はN氏しかいない。

日本の学校に通ったL氏は、日本の学校で知り合った日本人の友人と、御徒町在住のインド人の友人の両方がいるが、両者と一緒に遊んだりすることはなく、別々に両方と付き合っている。

O氏とP氏の通ったインターナショナル・スクールには日本人生徒が多く、インド人生徒もいたが、二人共、学校での友人はほとんどが日本人であった。インターナショナル・スクールに通う日本人生徒は、帰国子女や、親が裕福で英語教育を受けさせることを望んでいた。東京都在住のインド人次世代はO氏やP氏が育つ頃には少なく、インド人が集まるお祭り等のイベントで顔を合わせる程度で親しくはななかったので、現在の友人はほとんどが日本人で

ある。18歳で来日したM氏は、来日後の友人は日本人が多い。5名共インド国籍で、N氏は来年には日本国籍を取得することを考えていると述べたが、他の4名は日本国籍を取得しようとは考えていなかった。

以上から次世代は親世代と違って、インターナショナル・スクールに通った者も、インドで高校まで教育を受けた者も日本人と親密な友人関係を形成し、宗教や言語においては親の背景にあるインド文化をある程度は保持しながら、日本社会に適応しているといえる。

IV 考察

1 世代による変遷

1990年代から来日した御徒町周辺に在住するジャイナ教徒親世代は、ジャイナ寺院を核として宗教上でつながり、宗教イベントやスポーツ大会を開催し、SNSで多層的に結びつき、お互いが顔見知りであるという強固なコミュニティを形成していた。ほとんどが宝石商で、在日インド人宝石商協会を組織し、ビジネス上でもインド人同士が固く結びついていた。日本人宝石商組合であるJTOに加入しているインド人宝石商は2名だけであった。日本社会を肯定的に捉えてはいるが、日本人と密接な友人関係を形成している人は少なかった。

小山田〔2007〕は西葛西に集住するIT技術者家族が、地元の日本人とは深い交流をもっていないと指摘している〔小山田 2007〕。その点では、御徒町在住の宝石商親世代も同じであった。西葛西に集住するIT技術者と異なるのは、ジャイナ寺院がありジャイナ教に関わるイベントを開催し宗教上の結びつきが強いことと、ほとんど宝石商なのでビジネス上の結びつきが強くお互いが顔見知りであることである。西葛西に集住するIT技術者は、江戸川インド人会（ICE：Indian Community of Edogawa）という地域SNSのネットワークで結びついているが、御徒町在住のジャイナ教コミュニティのような宗教とビジネスでつながる強固なコミュニティは形成されていない。

宝石ビジネスは、インドで加工されたダイヤモンドや色石を輸入し、日本人卸売業者に販売することが中心であるので、ビジネス自体がインドとのトランスナショナルな関係の上に成り立っている。筆者はインド在住の宝石商である兄弟を訪れたが、ビジネス上ではインドの兄弟と緩く結びついていることがわかった。親世代は、ビジネスでインドを訪問することも多く、来日後もインド在住の親族とはビジネス上だけではなく親密な関係を保っていた。インド在住の親族が御徒町の宝石商の自宅に1、2ヶ月の間滞在することもあった。つまり、親世代は、御徒町に形成された強固なジャイナ教徒によるコミュニティとインドの親族との間のトランスナショナルな空間で生きることによって、日本社会で宝石ビジネスを営み、かつジャイナ教徒としての教えも順守し、日本人とそれ程密接な友人関係を築くことなく日本

社会に適応している。

次世代は、親世代とは違い、日本語を教授語とする学校に通った者だけではなく、インターナショナル・スクールに通った者も高校卒業後に来日した者も、読み書きができなくとも日本語の会話に困ることはなく、日本人の友人の方がインド人の友人より多かった。ヒンディー語の読み書きができるのは高校卒業後に来日した M 氏だけで、宗教心が篤い者はいなかった。M 氏は来日後菜食主義ではなくなり、ジャイナ教では禁止されている飲酒をする者もいた。このような在日インド人若者にみる文化的変容は、拙論 [山本 2016] で指摘したように、日本在住のヒンドゥー教徒やシク教徒の若者にも共通していた。

ヒンドゥー教徒やシク教徒の若者と異なるのは、親世代の形成した強固なジャイナ教コミュニティがあることである。ジャイナ教徒によるイベントに参加することによってジャイナ教徒の親世代ともお互いに顔見知りになっていたが、宗教心に大きな影響は与えていなかった。それは親世代が共通して、宗教を子どもに強制しないと語っていたことにも関連していると考えられる。また 20 代前半の N 氏と L 氏以外は、ジャイナ教徒コミュニティを通してインド人の友人を持っていたわけではなく、N 氏と L 氏も高校卒業までは学校での日本人の友人との関わりの方が親密であった。つまり、親世代の形成した宗教でもビジネスでも強固に結びついてコミュニティは、次世代の友人関係や宗教心にそれ程大きな影響を与えていなかった。

他方で、幼い頃から毎年インドの親族宅に 1-3 ヶ月間は滞在して、密接な関係を保持して育っていた。ウェッセンドルフは、こうした親の出身地での滞在をホリデー・トランスナショナルリズム (holiday transnationalism) と呼んでいる [Wessendorf 2016]。大学入学後はインドの親族を訪れる回数は少なくなっていたが、いとこの結婚式に出席したりして、幼い頃から「ファミリー」として育ち結びつきを保っていた。O 氏のように、たとえ日本人女性と恋愛結婚をしても、親と同居することを当然とする考え方には、親族との結びつきを保っていることが影響していると考えられる。つまり、次世代は、インドの親族との結びつきを保ち、親世代の形成したジャイナ教徒コミュニティと多少関わりながら、親世代に比べて人間関係においても職業においても日本社会に入り込んでいた。

2 移民第二世代のトランスナショナルリズム

移民第二世代にみるトランスナショナルリズムについての実証的研究は、二つの立場に分けられることが指摘されている。第一は、出身国との関係は第一世代には重要であるが、第二世代においてはそうではないとする立場であり、第二は、移民第二世代においても親の出身国との繋がりは保持されるとする立場である [Somerville 2008: 23]。本論の次世代の事例は後者であるといえる。移住先で親世代が形成した強固なコミュニティがあるが、次世代は

日本語の方が上手く、宗教心が篤い者はおらず、移住先の社会に人間関係においても職業においても入り込んでいる。他方で親の出身国の親族との結びつきを保持し、ホリデー・トランスナショナリズムが次世代の成長過程に大きな役割を果たしていた。

ウォルフはアメリカのフィリピン系第二世代がフィリピン人と直接関わらなくともフィリピンに対して感情的に愛着をもっていることをエモーショナル・トランスナショナリズム (emotional transnationalism) [Worf 2002] と呼んでいる。また、移住先の移民コミュニティの宗教や文化的実践に参加することを通して、直接親の出身国を訪問せずともトランスナショナルなアイデンティティを保持している場合があることが、オーストラリアのパレスティナ系やレバノン系第二世代の事例から報告されている [Lee 2011: 307]。しかし、本論の事例は、幼い頃からインドを訪問しインドの親族との結びつきを保持することによって、日本にいながら自らをインドにいる「ファミリー」の一員として捉えて育てていた。つまり、インド文化をそれ程保持しているとはいえないが、ホリデー・トランスナショナリズムが自己形成に大きな役割を果たし、インドは単なる親の出身国以上の意味をもっていた。ここには親世代がトランスナショナルな宝石商を営み、インドの親族との結びつきを来日後も保持していることが関連していたといえる。

以上本論では、移住先で親世代の形成した強固なコミュニティよりもインドの親族との結びつきの方が次世代の自己形成に大きな役割を果たしていることを明らかにしたことによって、従来の移民第二世代のトランスナショナリズムに関する議論に貴重な事例を提示できたと考える。

おわりに

本論では在日ジャイナ教徒の事例の分析から、日本における永住者が世代を重ねることによる適応のあり方の変化をトランスナショナリズムとの関係において析出できたといえる。このような分析視角は他の在日外国人にも適用でき、比較研究の可能性に繋がっている。

また、在日ジャイナ教徒親世代は日本の永住権を取得しているが、次世代にはインドや西欧諸国、香港等へ留学したり、そこで就職したり結婚したりする者もいる。これは、次世代にみるトランスナショナリズムは、親の移住先と出身国だけではなく、今後は他国への移住を含めて議論しなければならないことを示している。

附 記

本論は、東洋大学井上円了記念研究助成・研究所プロジェクト「首都圏在住アジア系の若

者にみるトランスナショナリズムに関する比較研究」(研究代表者:山本須美子,2019年度-2021年度)の研究成果である。

参 考 文 献

- Basch, Inda, Nina Glick Schiller, and Cristina Szanton Blanc,
1994 *Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments, and Deterritorialized Nation-States*, Utrecht: Gordon and Breach Science Publishers.
- Hall, Stuart,
1989 Cultural Identity and Cinematic Representation, *Framework* 36: 68-81.
- Lee, Helen
2011 Rethinking Transnationalism through the Second Generation, *The Australian Journal of Anthropology* 2: 295-313.
- Levitt, Peggy and Mary C. Waters (eds.),
2002 *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*, New York: Russell Sage Foundation.
- Somerville, Kara,
2008 Transnational Belonging among Second Generation Youth: Identity in a Globalized World, *Journal of Social Science* 10 (Special Volume): 23-33.
- Tsuda, Takeyuki
2003 *Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese Brazilian Return Migration in Transnational Perspective*, New York: Columbia University Press.
- Wadhwa, Megha,
2016 Binding Indian Abroad: Religious Participation of Indian Migrants in Tokyo, *Sophia Journal of Asian, African, and Middle Eastern Studies* 34: 113-134.
- Wassendorf, Susanne
2013 *Second-Generation Transnationalism and Roots Migration: Cross Border Lives*, London and New York: Routledge.
- Worf, Diane L.
2002 There's No Place like 'Home': Emotional Transnationalism and the Struggles of Second-Generation Filipinos, In *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*, edited by Levitt, Peggy and Mary C. Waters, pp. 255-294, New York: Russell Sage Foundation.

東聖子

- 2009 「滞日シク教徒の寺院と信仰——東京のグルデューワラーから考える移民と宗教のかかわり」『移民とともに変わる地域と国家（国立民族学博物館調査報告）』庄司博史（編）83: 105-120.

上杉富之

- 2004 「人類学からみたトランスナショナリズムの研究——研究の成立と展開及び転換」『日本常民文化紀要』24: 126-184.

上林龍永（渡辺研二・監修）

- 2007 『ジャイナ教の教え——信仰と成功を手にする一番簡単な方法』三笠書房.

上田真啓

- 2017 『ジャイナ教とは何か——菜食・托鉢・断食の生命観』ブックレット《アジアを学ぼう》49 風響社.

大谷杏

- 2008 「在日インド系国際学校における多文化教育——自国文化継承，国際化，ホスト社会との関係を中心として」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊 15(2): 95-105.

小山田基香

- 2007 「西葛西におけるインド人コミュニティ——IT 技術者家族へのインタビュー調査を中心に」『立教大学社会学研究年報』14: 59-68.

近藤正規

- 2007 「驚きのダイヤモンド加工业」『現代インドを知るための 60 章』広瀬崇子・近藤正規・井上恭子・南埜猛（編），141-144 ページ，明石書店.

澤宗則

- 2004 「グローバリゼーション下のデアアスポラ——在日インド人のネットワークとコミュニティ」2001-3 年度補助金基盤研究 (C) 報告書.

澤宗則

- 2018 「グローバル化とインド系移民社会の空間の再編成——グローバルシティ・東京を事例に」『インドのグローバル化と空間的再編成』207-242 ページ，古今書院.

澤宗則・南埜猛

- 2005 「在日インド人社会の変遷——定住地神戸を事例として」『兵庫地理』50: 4-15.

澤宗則・南埜猛

- 2009 「グローバルシティ・東京におけるインド人集住地の形成——東京都江戸川区西葛西を事例に」『国立民族学博物館調査報告』83: 41-58.

徐輝

2014 「在日インド人の教育問題——インド人国際学校とグローバル人材育成」『アジア教育学会』8別冊：71-86.

周飛帆・藤田秀央

2007 「地域社会における外国人の集住化に関する調査報告——江戸川区のインド人コミュニティを中心に」『言語文化論叢』(1) 千葉大学言語教育センター：81-102.

杉本星子

2010 「家族・親族・婚姻」『南アジア社会を学ぶ人のために』田中雅一・田辺明生(編), 34-47 ページ, 世界思想社.

福田朋子

2015 「在日パキスタン人移民のエスニック・ビジネスと越境する親族」『三田社会学』20: 38-51.

三田千代子

2009 『「出稼ぎ」から「デカセギ」へ——ブラジル移民100年にみる人と文化のダイナミズム』不二出版.

宮下良子

2009 「済州スニム(僧侶)のトランスナショナリティ——大阪市生野区の事例を中心に」『白山人類学』12: 35-51.

村瀬義史

2013 「インド人コミュニティと宗教」『ミナト神戸の宗教とコミュニティ』関西大学キリスト教と文化研究センター(編), 144-172 ページ, 神戸新聞総合出版センター.

山ノ内裕子

2016 「ブラジルへ帰国した日系人の若者たちの進路とエスニック・アイデンティティ——トランスマイグラントとしての経験から」『関西大学人権問題研究室紀要』72: 23-46.

山本須美子

2016 「在日インド人家族の学校選択を通して見たトランスナショナリズム」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』51: 166-148.

渡辺研二

2006 『ジャイナ入門』現代図書.

[ウェブサイト]

法務省

2018 「在留外国人人口統計 2018年6月現在」2019年6月11日アクセス.

http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.htm

東京都

2019「外国人人口統計・第2表 国籍・地域別外国人人口・平成31年1月1日現在」2019年8月10日アクセス.

<http://www.toukei.metro.tokyo.jp/gaikoku/2019/ga19010000.htm>

日本唯一の宝石問屋街ジュエリータウンおかちまち

2019「JTO 概要, 御徒町物語」2019年8月14日アクセス.

http://jto-net.com/about/page_04.php